



Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

# 「縁側で『こんにちは』」プロジェクト — 共有・共感・共生空間の創生 — について

第3回 国連防災世界会議  
パブリック・フォーラム  
2015.3.15 於 仙台市民会館

東北大学大学院文学研究科  
名嶋義直(日本語教育学)







Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

# 「縁側で『こんにちは』」プロジェクト — 共有・共感・共生空間の創生 — について

第3回 国連防災世界会議  
パブリック・フォーラム  
2015.3.15 於 仙台市民会館

東北大学大学院文学研究科  
名嶋義直(日本語教育学)





Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

## 【発表者】

名嶋義直(東北大学 大学院文学研究科 教授)

沢田充(社会福祉法人名取市社会福祉協議会 業務係長)

梅木俊輔(東北大学 大学院文学研究科 後期課程学生)

寺川直樹(東北大学 大学院教育学研究科 後期課程学生)

山森理恵(東海大学 非常勤講師)

## 【英語対応】

島崎薫(東北大学 グローバルラーニングセンター 助教)



## 【目次】

はじめに(名嶋義直) .....	1
「縁側で『こんにちは』」プロジェクトの過去・現在・未来 —その狙い, 活動, 効果, 課題—(名嶋義直) .....	2
公の立場から —「想いをつなぐ」—(沢田充) .....	7
学生ボランティアの立場から —コミュニケーションの多様性—(梅木俊輔) .....	9
市民の立場から —「名取で生きる」ということ—(寺川直樹) .....	10
支援者の立場から —楽しい時間をデザインする—(山森理恵) .....	11
おわりに(名嶋義直) .....	12
英文資料(島崎薫) .....	14
English version (Kaori Shimasaki) .....	14



## 【はじめに】

仮設住宅で新しい生活を始めることになった，そう考えてみて下さい。周りは知らない人ばかりです。はやく生活に慣れていくには見知らぬ人との間に関係性を作っていかなければなりません。とはいえ，それは想像以上に大変なことではないでしょうか。

もしその仮設住宅に昔の縁側があったらどんなことが起こるでしょうか。そこに座ってお茶を飲んでいたら，通りかかった人と何か話すきっかけが生まれるのではないのでしょうか。お茶やお菓子があれば「お茶でも飲んでいかない？」と気軽に声をかけることができるのではないのでしょうか。

「縁側で『こんにちは』」プロジェクトはそんなコミュニケーションを誘発する空間を作る取り組みです。今日は，このプロジェクトが何を目指し何を行ってきたのか，行政とどのような連携を行ってきたのかについて，取り組み責任者や名取市社会福祉協議会，学生ボランティアが話をします。それを通して，一般市民が「防災・減災・復興のまちづくり」に関わっていく一つの方法を提示したいと思います。

名嶋義直(東北大学 大学院文学研究科 教授)

Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

「縁側で『こんにちは』」  
プロジェクトの過去・現在・未来  
—その狙い, 活動, 効果, 課題—

東北大学 大学院文学研究科  
名嶋義直  
2015.3.15

1

## お話ししたいこと: その1

- 本プロジェクト実施に至った経緯。
- 本プロジェクトの背景や理念。
- 本プロジェクト活動時の様子。
- 本プロジェクトの課題と今後の展開。

2

## お話ししたいこと: その2

- 「縁側」活動は誰でもできる「まちづくり」。
- 「まちづくり」と防災との関連。
- 「縁側」と防災との関連。
- いろいろなところに「縁側」を。

3

## 背景1: 一人のボランティアとして

- 2011年3月下旬から、仙台市と名取市の災害ボランティアとして活動。
- 6月に宮古市、7月から8月は南三陸町でも活動。
- 2011年8月に名取市社会福祉協議会を中心とした災害ボランティアセンターの活動終了。
- 避難所から仮設住宅へ場が変わっただけ。
- 災害ボランティアセンターが閉じればボランティアは終わりではないのか。
- 自分(たち)に何ができるか。

4

## 背景2: 言語学系教員として

- 仮設住宅は強制的に構築された「多文化共生社会」。
- 地縁・血縁をリセットして再構築。
- 人間関係の構築が課題。コミュニケーションが重要。
- ウチとソトとのインターフェイスとしての「縁側」。
- 近くを通りがかっただけで誰かとコミュニケーションが始まることもあるのではないだろうか。
- 自然発生的なコミュニケーションを生み出す環境整備のようなことを継続して行えないか。

5

## 活動の理念

- 双方向のコミュニケーション。
- 一緒に何かする。
- 与える→一緒にする→自分でする。
- 一日の少しの時間でも楽しければ、残りも楽しくなる。
- 一部の人の参加でも、その人たちが楽しければ、周囲も楽しくなる。
- 「終わったあともなにかが残る」企画を。
- 大きな効果を狙わない。たとえ一人でもニーズがあればそれに応える。
- 継続性。

6

## 社会福祉協議会との連携

- 企画段階から相談
- スケジュール調整
- ニーズの掘り起こし
- 活動の見本(モデルケース)
- ボランティア研修の受け皿

7

## 実際の活動

- 東北大学文学部・文学研究科の教職員・留学生・日本人学生のボランティア(志願者)。
- 名取市の仮設住宅を一ヶ月に数回訪問。
- お茶会の開催。
- 「一緒に何かする」ワークショップ企画。
- 子供と遊ぶ。

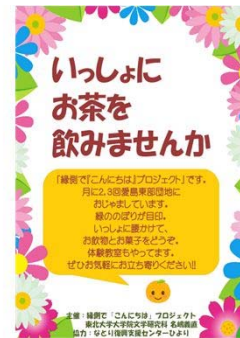
8

## ボランティア募集のポスター



9

## 「縁側」へのお誘い



10

## これまでの企画(一例)

- フラワーアレンジメント, リース作り, ちぎり絵, ループタイ作り, クリスマス飾付, 風鈴絵付
- 音楽コンサート, インド舞踊鑑賞
- 健康体操, ヨガ, アロマハンドマッサージ
- たこ焼き, すいか割り, 焼き芋
- お正月企画(福笑い, かるた, 書き初め等)

11

## 企画の告知:ポスターと回覧用ちらし



12





## 双方向のコミュニケーション誘発



19

## 音楽コンサートに乱入



20

## 実際にやってみて

- 継続していくことの大変さ。
- 参加者同士のコミュニケーション増加。
- 外の社会の人から中の社会の一員に。
- 継続していくことの重要さ。

21

## 課題1

- ボランティア学生の関心の薄れと継続性。  
志望者減。1~2回で後は参加しなくなる人。
- ➡ 震災復興と自分の生活との接点を感じるか。
- ➡ 役に立ちたいという思いが強い人ほど、役に立っているかどうかかわからないとモチベーションが低下するのではないか。
- 自分のため→人のため→自分のため→？

22

## 課題1に関して

- なぜボランティアをするのか。  
人はそこに何を求めているのか。
- ➡ 人によっても、同じ人の中でも段階によって違う。
- 本プロジェクトの活動成果は客観的な「量」や「質」では計れないもの。
- ➡ モチベーションをどう維持して行くかは個人の問題。
- ➡ 事前オリエンテーションと体験参加。

23

## 課題2

- 全体の中の個人にどう関わって行くか。
- お茶会の輪の中で話すことと、一対一のコミュニケーション時に話すこととの間に、質的な違いがある。それにどう向き合っていくか。
- ➡ お茶会と並行して個人と向き合える企画を。

24

## 今後の展開

- 今まで通り, 1ヶ月に2回のペースで活動。  
時々何らかの特別企画。
- ボランティアインターンシップの受け皿。  
名取市社会福祉協議会, 復興支援センター  
ひよりからの依頼や教員間のネットワーク。
- 「縁側」ノウハウの拡散, 「縁側」の拡散。

25

## 「縁側」プロジェクトは「まちづくり」

- 災害後には強制的にコミュニティが形成されることがある。
- そこでは構成員の結びつきをつくるのが大切である(でもそれは難しい)。
- 人と人がつながる「場(縁側)」を提供してコミュニティのつながりを作る支援をする。
- 縁側プロジェクトはそこを支援するソフト面の支援である。
- 縁側プロジェクトは, そういう意味で「まちづくり」支援である。

26

## 「まちづくり」は「防災・減災」に

- 構成員間の結びつきが強いコミュニティは災害にも強いと言われる。
- 災害が起こりそうなとき, 起こったとき, 起こったあと, どのようにフォローし, ケアして行くかにコミュニティの差が出る。
- しっかりしたコミュニティを作ることは未来に向けた防災・減災活動となる。
- 縁側は未来に向けた防災力・減災力の支援。

27

## 日常社会における災害・防災・減災

- 震災復興だけが社会問題ではない。
- 社会の中のあらゆる問題を災害, または潜在的な災害だと考えることができる。
- 震災復興だけが「ボランティア」ではない。
- それぞれが少し行動力を出して, 自分の関わられる範囲で「まちづくり」に主体的に関わっていくことが, 災害に強い社会を作ることになる。

28

## 「縁側」からのメッセージ

- 縁側プロジェクトの例はその取り組みが専門家でなくても充分可能であることを示している。
- 「縁側」は主体的に社会と関わること。
- 「縁側」はこちら側の社会と向こう側の社会とのインターフェイス
- 皆さんもぜひご自分の周りに「縁側」を。

29

## 最後に

- 私たち一人一人が社会の構成員。
- 一人一人が主体的に社会と関わる意識を。
- 社会に潜む「災害」に意識を向け,
- そして, 行動を。

30

Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

～公の立場から「想いをつなぐ」～

社会福祉法人名取市社会福祉協議会  
業務係長 沢田 充  
2015.3.15

31

### 名取市の位置

32

### 名取市の概要について

- ◆人口(平成26年3月31日現在)
  - 総 75,020人
  - 男 36,784人
  - 女 38,236人
  - 65歳以上 14,895人
  - 高齢化率 19.85%
- ◆世帯数(平成26年3月31日現在)
  - 27,985世帯
- ◆面積
  - 97.76 km<sup>2</sup>

33

### 東日本大震災による名取市の被害の概要について

区 分	名取市	宮城県
震災前後の人口	(H23.2月末) 73,502	2,346,853 (H23年3月1日)
	(H23.7月末) 71,752	
	(H25.4月末) 73,601	
世帯数	26,433 (H23年2月末)	915,193 (H23年3月1日)
死亡者数	911 (市内で発見された遺体数)	9,593
行方不明者数	40	1,283
住宅、建物被害 【全壊、半壊】	3,930	237,997

34

### 震災前後の閉上

震災前の閉上

2007年5月  
社団法人東北建設協会提供

震災後の閉上

2011年4月17日  
社団法人東北建設協会提供

※名取市HPより

35

### 名取市の地図と津波の浸水域

36

本題に入る前に・・・  
社会福祉協議会とは、どんな組織団体なのか

- ◆ **コミュニティワーク**(地域福祉とその技術)の普及推進と、民間福祉事業や**ボランティア**活動の推進・支援を目的としている。  
○社会福祉法第109条に定められている**民間福祉団体**  
※「**自主性**」と「**公共性**」の二つの側面を持つ組織  
◎私たち社会福祉協議会は「社会福祉法人」である
- 民間福祉事業者と住民と行政機関との橋渡し、福祉施設や団体の連合会とその事務局、各福祉事業者間の利害調整、住民参加による地域福祉の推進、福祉専門職の職員養成、福祉人材の確保、福祉サービスの第三者評価
- 行政の委託事業や福祉・介護サービス事業、障害者など要介護者の生活相談事業を展開しているところが多い。

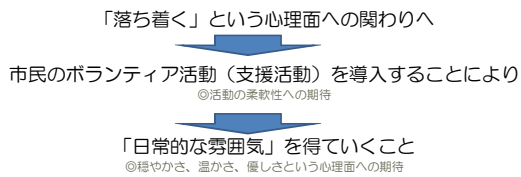
37

名取市社会福祉協議会は、どんな「想い」をもって、活動を行っているのか

- 日常での活動では、「**“お互い様”**の**関係**」を大事にしていること、その具現化に努め、様々な地域福祉活動を展開しています。
- 東日本大震災による被災者支援で重要視したのは、「**地域コミュニティ**」の**再構築**。
- “仮の場所”であっても、被災前にその地域で共に暮らした地域住民同士の関わりを再度深めていく場づくりに力を注ぐ。
- その取り組みとして、仮設住宅集会所を活動拠点に、「生活支援相談員」を「**常駐**」し、「**顔**」の**見える関係**を大事に関わりを深めてきました。
- そこには、「生活再建のための支援」や「心のケア支援」があり、被災者への「**寄り添い**」と「**心の落ち着き**(心の拠りどころ)」が、次への備えになると信じてついでいます。  
◎「寄り添う」(支援の姿勢) - 「落ち着かせる」(心理面への関わり)

38

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」との関係  
協同による成果



参加者の声から  
\* 季節感のある茶葉子があっけうらしい。  
\* 季節感のあるお花が用意され、部屋に花があるだけでも癒される。  
\* 子どもと遊んでくれて、助かっています。

生活支援相談員の声から  
◎「今日は何しようかな・・・」という何気ない参加者の発した言葉に「**ありつつける**」という「**継続性**」の重要性を感じました。

39

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」との関係  
はじめの一歩(なつかしいですね)

- “私たちにできること” 災害ボランティアセンターでの活動からつづく「想いのつづき」をつないで・・・  
◎マスター名嶋さんから、“テントを活かして”が活動する仮設住宅地選定の条件でした。  
「縁側で『こんにちは』プロジェクト」の初期の活動の様子(2013年12月)



◎「参加者の数に拘るのではなく、“ここを大事にしている人のために”」「拠り所」にしている「想い」をもった被災者のために・・・と活動への想いの共有を図りました。

40

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」から  
見えた人間の可能性

- ～ここからの善意が人の可能性を引き出す～
- 人の可能性を信じる。
  - 関わるすべての人の「想い」をつなぎ、相互の関係とその環境から「新しい可能性」が生まれ、明日への希望や様々な困難にも一緒に向き合える、そんな関係づくりが「災い」を防ぐ(防災)、あるいは災いを最小限にできる(減災)、最大のツール(道具)である。

～福祉の支援の分野から「エンパワメント」～

- ◎私たちひとりひとりや誰でも潜在的に持っているパワーや個性をいきいきと息吹かせること、すべての人が持つそれぞれの内的な資源(リソース)にアクセスすること。
- 人が本来持っている素晴らしい、生きる力を湧き出させること。
- 人と環境の相互作用

41

想いをつないで  
縁を結いて

～届け未来、明日へ～




42

Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

**学生ボランティアの立場から  
ーコミュニケーションの多様性ー**

梅木俊輔  
東北大学大学院文学研究科  
博士課程後期3年



43

**「縁側」活動とは：**  
コミュニティーへの「アクセス」という点で、SNS  
(Twitter, Facebook, LINE等)の使用と  
共通する。

**両者の違いとは：**  
よく知らないコミュニティーに「参加する」新鮮さ。

44

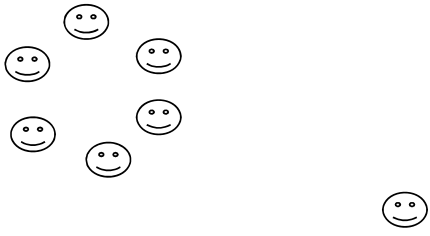
**新鮮さ： コミュニケーションの多様性**  
方言が分からないことがある。

お茶会の輪から離れたところから話す人がある。

お茶会には参加せず、通りがかりに話していく  
人がある。

45

**離れたところから話す人**



46

今、この場で知らない人に向けて話す(発表する)のも、コミュニケーションの多様性を知ること。

→トータルで考えると、「縁側」活動の一部。

47

**まとめ： 人とのつながりを作る支援**

最初は、単なる傍観者的存在かもしれない。

→徐々に、「参加する」ようにしていけばいいのではないか。

48



Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

市民の立場から  
—「名取で生きる」ということ—

寺川 直樹  
東北大学大学院教育学研究科  
博士課程後期1年

49

問1:「被災者」とは誰か。

- 東日本大震災:津波による甚大な被害

⇒地震の被害だけを受けた人(私)も「被災者」?

⇒物的・人的被害の(ほとんど)ない人(私)もまた「被災者」?

50

問2:「名取市民」とは誰か。

- 「名取市民」  
=「被災地名取に(ただ)住んでいる人」?  
※名取市:海あり山あり平地あり・・・
- 名取で暮らしながらも、名取に「無関心」だった私  
⇒震災を経て、「名取で生きる」ことを強く意識するよう。

51

問3:「被災者」と同じ気持ちになれるのか。

- 津波で大切な人・財産を失った人々  
⇔日常生活を「当たり前」に暮らす私
- 幼稚園の写真
- 「また次回」

52

「名取市民として」生きるために

- 矛盾と葛藤をそのままに引き受けながら、「被災者」の方々と向き合い、問い続けるということ。
- 「生かされている」ということの自覚。  
:「御霊への祈り」と「自然への畏敬」
- 「自分が暮らす土地で」生きるということ。  
:限界(諦念)と決意

53

あなたは「どこで」生きますか?

「彼らの風土に即して生まれ、感性豊かであるすべての民族が、なぜその風土に忠実であり、そこから離れがたく感じるのかということが、まずもって明らかとなる。つまり、彼らの身体や生活様式の状態、彼らが幼少期から慣れ親しんだあらゆる喜びや営み、そして彼らの心の全視野が風土的なのである。彼らからその土地を奪えば、彼らからすべてを奪い去ることになる。」

-J. G. ヘルダー、『人類歴史哲学考』(発表者訳)  
J. G. Herder, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* (Riga u. Leipzig 1785)

54

Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience

支援者の立場から  
—楽しい時間をデザインする—

東海大学 国際教育センター  
山森 理恵

55

## お話ししたいこと

- 本プロジェクトの中のフラワーアレンジメント教室
- 実際の活動内容
- いっしょにやることの意義
- 発表者と本プロジェクトとの関わり
- フラワーアレンジメント教室開催の意味

56

## 本プロジェクトの中の フラワーアレンジメント教室

- ワークショップ企画として実施
- いっしょに何かをする
- 作ったものを家に持ち帰って飾る楽しみ、  
うちに帰ってから見る楽しみ
- お花は笑顔を生み出す

57

## 実際の活動内容

- 事前にポスター掲示、ちらしを回覧、開催告知
- 集会所にて申込受付
- お花の発注
- フラワーアレンジメント教室開催
  - 使用する花材にまつわる話を紹介
  - 花材の特徴の説明
  - デモンストレーション
  - 参加者が作品を作る
  - 参加者相互で作品を披露し合う

58

## いっしょにやることの意義

- 新しいお花との出会い
- お花にまつわる話との出会い
- ほかの人の作品との出会い  
同じ花材を使っても全く趣の異なる作品  
→次にお花を生けるときアイデアに

↓

楽しい時間のデザイン

59

## フラワーアレンジメント教室開催の意味

- フラワーアレンジメントを通して、  
相互の楽しい時間をデザインできる
- 地域の人間ではない「外からの支援者」  
だからこそ生まれるコミュニケーションの形
- 「与える」から「引き出し、強める」へ

60





## 【おわりに】

仮設住宅に限らず、災害後には強制的にコミュニティが形成されることがあります。それを単なる集団居住地ではなく、1つの社会として発展させていくためには、そこに住んでいる人々の結びつきを作ることが大切です。しかし、それはとても難しいことです。「縁側で『こんにちは』」プロジェクトは、そこを支援するソフト面での取り組みです。人と人がつながる「場(縁側)」を提供してコミュニティのつながりが生まれ育っていく過程を支援します。そういう点で言えば、「縁側で『こんにちは』」プロジェクトは、小さな「まちづくり」であると言えます。

その「まちづくり」と防災や減災とは、どのような関係があるのでしょうか。実は、「そこに住んでいる人々の結びつき」が強いコミュニティは、いざという時に災害にも強いと言われています。つまり、しっかりしたコミュニティを作るとは、未来に向けた防災・減災活動だと言えるのです。今回の東日本大震災や原発事故のように、どんなに注意していてもどうしても災害が起こることもあります。どんなにそれに備えて準備していても充分ではないということも起こるでしょう。そのような時に、一旦はこわれてしまったコミュニティを、どのようにフォローシケアして行くかが、次の防災・減災につながるのではないのでしょうか。

災害とは自然災害だけではありません。社会の中のあらゆる問題を災害、または潜在的な災害だと考えると、残念ながら私たちの社会は災害で一杯です。だから、それぞれが少し行動力を出して、自分の関われる範囲で「まちづくり」に主体的に関わっていくことが、災害に強い社会を作ることになると思います。「縁側で『こんにちは』」プロジェクトの例は、その取り組みが専門家でなくても充分可能であることを示しています。皆さんもいろいろなところに縁側を！

名嶋義直(東北大学 大学院文学研究科 教授)





Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience



# “Let’s say ‘Hello’ in the *Engawa*” project — Creation of communion, compathy and community —

3<sup>rd</sup> UN World Conference on Disaster Risk Reduction  
Public Forum  
15<sup>th</sup> March 2015 @ Sendai Civic Auditorium

Yoshinao Najima (Japanese Language Education)  
Graduate School / Faculty of Arts And Letters,  
Tohoku University





**Tohoku University DRR Actions**  
Contributing to Global Disaster Resilience

### **【Presenters】**

Yoshinao Najima (Tohoku University / Professor)

Mitsuru Sawada (Natori city Social welfare conference)

Shunsuke Umeki (Tohoku University/ Ph.D. student)

Naoki Terakawa (Tohoku University/ Ph.D. student)

Michie Yamamori (Tokai University/ Part-time lecturer)

### **【Interpreter】**

Kaori Shimasaki (Tohoku University/ Asst. Professor)





## 【Outline】

Opening address (Yoshinao Najima) .....1

Past, present, and future of “Let’s say ‘Hello’ in the Engawa” project  
—Our aims, activities, outcomes, and challenges (Yoshinao Najima) .....2

From the perspective of a public sector employee  
—Connecting people’s desires (Mitsuru Sawada) .....7

From the perspective of a student volunteer  
—Diversity of communication (Shunsuke Umeki) .....9

From the perspective of a citizen  
—Meaning of ‘living in Natori’ (Naoki Terakawa) .....10

From the perspective of a volunteering professional  
—Design an enjoyable time (Michie Yamamori) .....11

Closing address (Yoshinao Najima) .....12

English version (Kaori Shimasaki ) .....13





## 【Opening address】

Imagine that you start to live in a temporary house after a disaster. The people around you are all strangers. Can we even begin to imagine how hard it would be to rebuild your life and to foster new relationships?

Would a common area for residents make things easier? *Engawa* is the Japanese word for an open corridor where people socialize while having tea together. When you have a cup of tea in the *Engawa*, you might meet someone new and start a conversation. This could be as simple as asking the stranger “Would you like a cup of tea?”.

Our *Engawa* project tries to create exactly such a place, where people can communicate with each other and build relationships. Today, we, the organizers of this program, Natori city Social welfare conference, and volunteer students, would like to introduce our aims and activities, explaining how we work together with the local government. In doing so, we would like to propose a way for people to contribute, even if only in a small way, to town-development, reconstruction and disaster prevention.

Yoshinao Najima (Tohoku University / Professor)




 Tohoku University DRR Actions  
 Contributing to Global Disaster Resilience

**Past, present, and future of  
 “Let’s say ‘Hello’ in the *Engawa*” project**  
 —Our aims, activities, outcomes, and  
 challenges—

Yoshinao Najima  
 Graduate School / Faculty Of Arts And Letters,  
 Tohoku University  
 15<sup>th</sup> March 2015

1

### What I would like to talk about : Part-1

- How have we developed this project?
  - What is the background and philosophy of this project?
  - How do we carry out this project?
  - What are our challenges and future plans for this project?
- 2

### What I would like to talk about : Part-2

- *Engawa* is a town development activity anyone can conduct
  - Relationship between “town development” and disaster prevention
  - Relationship between “*Engawa*” and disaster prevention
  - Let’s create “*Engawa*” around you!
- 3

### Background-1: As a volunteer

- I have volunteered in Sendai and Natori since the end of March 2011.
  - I worked as a volunteer in Miyako in June 2011 and in Minamisanriku in July and August 2011.
  - The disaster volunteer center was organised by Natori city Social welfare conference and closed in August 2011.
  - The only change for the victims was a move from the evacuation center to temporary houses
  - Does closing the disaster volunteer center mean we have finished volunteer work?
  - What can we do next?
- 4

### Background-2: As a scholar of linguistics

- Temporary houses are an enforced “cross-cultural community”
  - Re-set local and blood relationships and construct new relationships
  - Creating networks is the challenge, communication is important
  - *Engawa* works as an interface between *Uchi* and *Soto*
  - Communication between residents can occur by itself
  - Would it be possible to create an environment that facilitates communication?
- 5

### Our philosophy

- Bidirectional communication
  - Doing something together
  - Volunteers provide an activity → Volunteers hold the activity together with residents of temporary housing → Residents continue to do the activity by themselves
  - If you can enjoy part of your life, it makes the rest enjoyable.
  - If some of the people have fun, other will have fun.
  - After the events, ‘something’ should remain behind.
  - This project does not necessarily need to produce significant results, as long as it helps one person it can be continued.
  - Continuity
- 6

### Collaboration with Natori city Social welfare conference

- Consultation from planning stage
- Schedule arrangement
- Finding out people's needs
- Models of activities (Model cases)
- Place for volunteer training

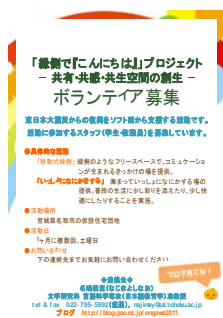
7

### Our activities

- Academics from Graduate School / Faculty Of Arts And Letters, Tohoku Univ. and international/local students from Tohoku Univ. (Volunteers)
- Visit to temporary houses in Natori a few times a month
- Organizing a tea party
- "Doing something together" workshops
- Play with children

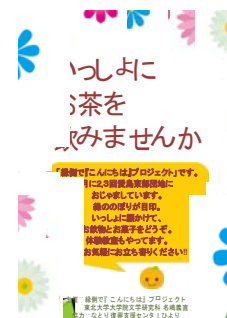
8

### Poster for volunteer recruitment



9

### Invitation to Engawa



10

### Our workshops

- Flower arrangement, Wreath workshop, Chigiri-e workshop, Bolo tie workshop, Christmas decoration workshop, Paining of wind-bells workshop
- Music concerts, Indian dance viewing
- Exercise, Yoga, Aroma hand massage
- Takoyaki cooking, Watermelon cracking, Sweet potato baking
- New year events (make-a-face game, Japanese card game, a special piece of calligraphy for the New Year)

11

### Advertisement: Poster and flyer



12



### Advertisement: Registration



13

### Korean language class



14

### Flower arrangement



15

### Wreath



16

### Chair Yoga



17

### Wind-bell



18

### Inducement of dual-directional communication

19

### Involved in a music concert

20

### What I realized through our activities

- Challenging to continue this project
- Increasing communication between participants
- Becoming an insider of the community
- Importance of continuity

21

### Challenge-1

- Decreasing interest among volunteer students, leads to lower attendance

Less volunteers: Students who don't participate after a only a few sessions

- ➡ Can they feel any connection between their daily lives and disaster reconstruction?
- ➡ The more students wish to help people, the more dramatically their motivation drops when they cannot feel that they are actually helping people

For myself → For others → For myself → ?

22

### Challenge-1 (Con.)

- Why do we volunteer?  
What do we expect from volunteering?
- ➡ Expectations differ, depending on the person and their involvement

Impossible to evaluate the outcomes of this project, neither quantitatively nor qualitatively

- ➡ How can they maintain their motivation is their personal issue
- ➡ Orientation and trial participation

23

### Challenge-2

- How do I communicate with a particular person?
- A Chat in the tea parties and a one-to-one conversations are qualitatively different. How do we deal with this?
- ➡ Plan not only tea parties but also events which provide opportunities to have one-to-one conversation

24

### Future plans

- Continue to have activities twice a month

Sometimes special events

- Place for volunteer internship  
Natori city Social welfare conference,  
Reconstruction support center, Request from  
Hiyori, Networking in academics
- Introducing the concept of *Engawa* and  
teaching how to create *Engawa*

25

### *Engawa* is a “town development” project

- After a disaster, communities might be forcibly  
built
- Important to develop connections between  
members (But difficult)
- By providing a “place (*Engawa*)” where people  
can connect with each other, we can help people  
to communicate with each other
- *The Engawa* project is a mental support
- In this sense, *Engawa* is helping to develop a  
town’s community

26

### Town development can be disaster prevention and reduction

- Community with strong connections between  
members can survive disasters better
- Strong connections make differences, as  
disaster are likely to happen, are happening,  
and have happened
- The creation of a strong community implies  
disaster prevention and impact reduction
- *Engawa* is support for disaster prevention and  
impact reduction

27

### Disasters, prevention and impact reduction in our daily life

- Earthquake disaster reconstruction is not only a social  
issue
- It is possible to see various issues in the society as a  
disaster
- Reconstruction is not only done by volunteers
- Everyone’s involvement in town development can make  
the strengthen societies in their ability to cope with  
disasters

28

### Message from *Engawa*

- *The Engawa* project can be done by anyone  
not only professionals
- *Engawa* is the active involvement in a society
- *Engawa* is an interface between different sites  
of society
- Create an *Engawa* around you

29

### Conclusion

- Each of us is a member of society
- Every single person needs to be aware of their  
active involvement in their society
- Look at potential “disaster” in your society
- And take action

30

Tohoku University DRR Actions  
Contributing to Global Disaster Resilience


From the perspective of a public sector employee  
—Connect people's desires~

Natori city Social welfare conference  
Operation unit chief Mitsuru Sawada  
15<sup>th</sup> March 2015




31

### Location of Natori city



32

### Natori city

- ◆ Population (As of 31<sup>st</sup> March 2014)
  - Total 75,020
  - Male 36,784
  - Female 38,236
  - Over 65 14,895 (19.85%)
- ◆ Number of households (As of 31<sup>st</sup> March 2014)
  - 27,985
- ◆ Land area
  - 97.76 km<sup>2</sup>

33

### Brief overview of damage in Natori caused by the earthquake


Category	Natori city	Miyagi Pref.
Population	(End of February 2011) 73,502	2,346,853
	(End of July 2011) 71,752	(1 <sup>st</sup> March 2011)
	(End of April 2013) 73,601	
Number of households	26,433 (End of February 2011)	915,193 (1 <sup>st</sup> March 2011)
Number of deaths as of 31 <sup>st</sup> January 2014	911 (Found in Natori city)	9,593
Number missing as of 31 <sup>st</sup> January 2014	40	1,283
Damages of houses and buildings [complete/half collapse] as of 5 <sup>th</sup> March 2012	3,930	237,997

■Cited from Miyagi Pref. And Natori City's HP

34


### Comparison between before and after

Yuriage area  
before the earthquake



May 2007  
Provided by Tohoku Constructor Association

Yuriage area  
after the earthquake

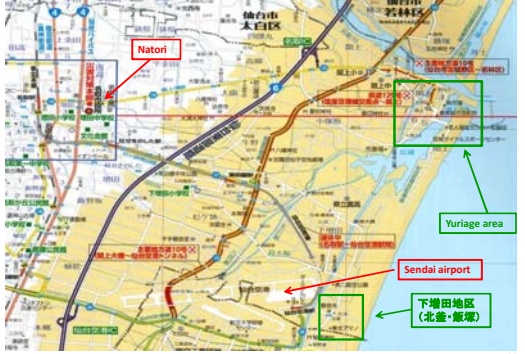


17<sup>th</sup> April 2011  
Provided by Tohoku Constructor Association

※Cited by Natori city's HP

35

### Map of Natori and Tsunami affected area



36

Before my talk...  
What is a social welfare conference?

- ◆ Aims to develop **community work** (community welfare and its method) and support private welfare and **volunteer work**.
- **Private welfare association** provided in Article 109 of the Social Welfare Act
- ✂ **Organization which has two dimensions: "Autonomy" and "Publicness"**
- Bridging among private welfare, citizen and government committee. Coordinating the interests of welfare institutions, joint associations, and welfare service operators. Promoting citizen involvement in community welfare, training and recruiting welfare specialists. Evaluation of welfare services by a third-party.
- Many social welfare conferences undertake projects sponsored by the government, conduct welfare services and counseling for people with disabilities.

37

What policy do we have ?

- In daily activities, we have a high regard for **'Helping each other'**, try to embody the idea and develop community welfare
- In terms of the Great East Japan earthquake, we focus on **reconstruction of 'local communities'**
- We put extra effort on the development of relationships between people who used to live next to each other before the earthquake.
- In order to achieve this, we allocate **full-time "welfare counselors"** and promote face-to-face communication
- We help people put their lives back and provide mental support in order to create **places they belong to**. It will be a preparation for the next disaster.

38

Working with the *Engawa* project:  
Outcomes from collaboration work

Support to create places which they belong to

↓

Introducing people's volunteer work

↓

Take back them to their 'daily lives'

From participants

- \* I can enjoy seasonal sweets.
- \* I can enjoy seasonal flower and it makes me relaxed.
- \* It is very helpful for volunteers to play with my children.


From welfare counselors

☞ I heard that a participant says 'what do I do today? '. It made me feel the importance of continuity

39

Working with the *Engawa* project:  
The first step

- "What we can do": continue to have our desire



40

Working with *Engawa* project:  
people's possibilities

~Good will bring out people's possibilities~

- Believe in people's possibilities
- Connect people's desires and create new possibilities, develop strong relationships. It enables them to deal with challenges together and improves disaster prevention

41

42


**Tohoku University DRR Actions**  
 Contributing to Global Disaster Resilience

---

**From the perspective of a student volunteer**  
**— Diversity of communication —**

Shunsuke Umeki  
 PhD student  
 Graduate School of Arts and Letters,  
 Tohoku University


43

**What is an *Engawa* activity? :**  
 In terms of access to community,  
*Engawa* is similar to SNS (Twitter, Facebook, LINE etc)

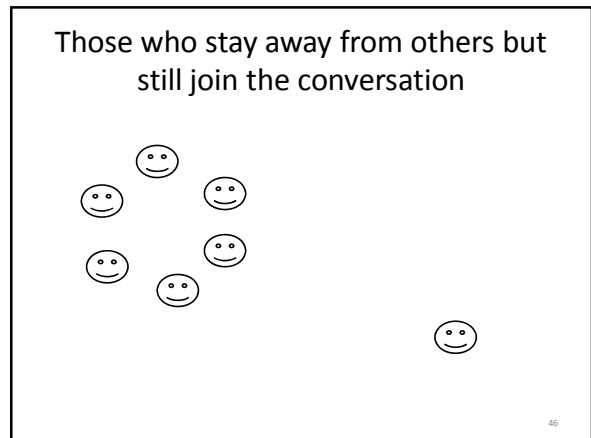
**Difference between *Engawa* and SNS:**  
**Newness (Participation in an unfamiliar community)**

44

**Newness: Diversity of communication**

Difficult to understand *Engawa* participants' directly  
 Some people stay away from others but still join the conversation  
 Some people don't participate in the tea party but just drop by

45



This presentation (talking to people I don't know) is also a way to understand the diversity of communication

→In other words, this is part of an *Engawa* activity


47

**Conclusion:**  
**Support to create Networks**

At the beginning, an outside observer

→Develop participation through *Engawa*

48


**Tohoku University DRR Actions**  
 Contributing to Global Disaster Resilience

---

## From the perspective of a citizen —Meaning of ‘living in Natori’ —

Naoki Terakawa  
 PhD student  
 Graduate School of Education  
 Tohoku University

 49

### Q1 : Who is a ‘disaster victim’?

- The Great East Earthquake : extensive damage by Tsunami
- ⇒ Me (a person affected only by the earthquake)?
- ⇒ Me (a person who has little damage physically and mentally)?

50

### Q2: Who is a ‘Natori citizen’?

‘Natori citizen’  
 = Just those who live in Natori?  
 ✕Natori city is very large, including coastal area, mountain area, and flatland

- I have lived in Natori but didn’t care about it  
 ⇒After the earthquake, I started to strongly think about the meaning of ‘living in Natori’

51

### Q3: Can I understand feeling of the disaster victims?

- Those who lost their important people and property  
 ⇔ Me (a person who lives the same life)
- Photos of Kindergarten
- ‘See you next time’

52

### Meaning of living as a ‘Natori citizen’

- To see the contradiction, face the disaster victims, keep asking myself
- To be aware – I am made to live  
 :Pray for the departed souls and respect for nature
- To live in ‘a place I live in’  
 : Limitation and decision

53

### Where do you live?

In the first place it is obvious why all sensual people, formed fashioned to their country, are so much attached to the soil, and so inseparable from it. The state constitution of their body, their way of life, the pleasures and occupations to which they have been accustomed from their infancy, and the whole circle of their ideas, are climatic. Deprive them of their country, you deprive them of every thing.

(Partly modified by Terakawa)

J. G. Herder, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* (Riga u. Leipzig 1785) ,  
 English translation; *Outlines of a philosophy of the history of man* (transl. by T. Churchill, London 1800)

54


**Tohoku University DRR Actions**  
Contributing to Global Disaster Resilience

---

From the perspective of a volunteering professional  
—Design an enjoyable time—

Michie Yamamori  
 International Education Center  
 Tohoku University


55

### What I would like to talk about

- Our flower arrangement workshops in this project
- Our activities
- The meaning of doing something together
- My involvement in this project
- The meaning of having flower arrangement workshops

56

### Our flower arrangement workshops in this project

- Workshop
- Doing something together
- Enjoy what you made
- Flowers make people smile

57

### Our activities


- Posters, flyers
- Registration at the community center
- Order of flowers
- Flower arrangement
  - Introducing of flowers we are going to use
  - Explaining characters of the flowers
  - Demonstration
  - Creating their own art work
  - Showing their own works to each other

58

### The meaning of doing something together

- Get to know new flowers
- Get to know the stories of the flowers
- Enjoy others' work
  - same flowers but different art works

→New ideas will come from others' work

  
 Design an enjoyable time

59

### The meaning of having flower arrangement workshops

- Design an enjoyable time through flower arrangement
- A type of communication only outsiders can develop
- From 'Provide' to 'Bring out'

60





### 【Closing address】

Not only in temporary houses, but also in other places, communities might be forcibly built after a disaster. In order to develop communities, not just collective houses, it is important to create connections among residents, which is challenging. With the *Engawa* project, we try to support community development by providing a “place (*Engawa*)” where people can connect with each other and provide support to build these relationships. In this sense, the *Engawa* project can be seen as a town-development activity.

How does that town-development activity contribute to disaster reduction and prevention? A community build on strong relationships among its members can survive disasters better. In other words, fostering strong relationships in communities lead to disaster reduction and prevention. As the Great Japan Earthquake and the nuclear power plant accidents happened, a disaster could happen no matter how careful we as a nation are. No matter how well one prepares for a disaster, it might not be enough. When disaster strikes, our care of destroyed communities can be part of the preparation to strengthen the community for future disasters.

Not only natural disasters but also social issues can be regarded as disasters. In that sense, the world is full of disasters or potential disasters. Therefore, it is necessary to take action by yourself and be actively involved in “town-development” activities in order to create strong communities. This project shows that the *Engawa* project can be done by anyone not only by professionals. Create an *Engawa* around you!

Yoshinao Najima (Tohoku University / Professor)



Tohoku University DRR Actions

Contributing to Global Disaster Resilience

「縁側で『こんにちは』」プロジェクト  
— 共有・共感・共生空間の創生 —  
について

第3回国連防災世界会議 パブリック・フォーラム  
2015.3.15 於 仙台市民会館

【執筆者(掲載順)】

名嶋義直(東北大学 大学院文学研究科 教授)  
沢田充(社会福祉法人名取市社会福祉協議会 業務係長)  
梅木俊輔(東北大学 大学院文学研究科 後期課程学生)  
寺川直樹(東北大学 大学院教育学研究科 後期課程学生)  
山森理恵(東海大学 非常勤講師)  
島崎薫(東北大学 グローバルラーニングセンター 助教)

【編者】 「縁側で『こんにちは』」プロジェクト 取り組み責任者 名嶋義直

【発行】 東北大学大学院文学研究科「縁側で『こんにちは』」プロジェクト

【発行日】 2015年3月11日





